



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



第21回日本文化交流団

安部 花子

10月6日～12日、第21回日本文化交流団に同行いたしました安部と申します。今回は着物・茶道・折形の先生方とともに、私は風呂敷の講師として総勢6名での日本文化交流出張に同行させていただきました。

今までロシアには観光客としてしか訪れたことがなかった私にとって、今回ほど人々の親切さや温かさにたくさん触れた機会はありませんでした。このような世界情勢、日本文化の講習会なんて全然人が集まらないのではないかと不安な気持ちでいっぱいのまま出発当日を迎えましたが、到着してから目にしたのは、会場の椅子が足りず立ち見まである参加者、つたないながらも一生懸命日本語で話しかけてくれる子どもたち、温かいお茶や食事でもてなし懇談の場をもってくださいる地元の交流協会や施設スタッフの皆様、そしてこの日のために一生懸命練習してくれたのか、たった6人の私たちのために、伝統的な歌と踊りで大歓迎してくれる大勢の子どもたち…自分は何を不安に思っていたんだろう。世界情勢がどうあれ、日本文化に興味をもって足を運んでくれる人がこんなにもいるということ…講習を行うにあたって、この事実は大きな自信となりました。政治に左右されない「文化」の偉大さを痛感した出来事です。

茶道講習では、日本から持参した和三盆糖を使用し、干菓子木型で型抜きをすところから体験してもらうという、日本でもなかなか体験できないような企画を実施。パンっと型から抜いた瞬間、若草色のブドウと薄桃色の紅葉のかたちをした美しい干菓子が現れ、歓声が上がりました。はじめは苦くてなかなか抹茶を飲

み進められなかった子も、お菓子を食べてからお茶を飲んでよいことが分ると、皆さん残さず飲んでお菓子も完食。日本語で「ありがとう」と言ってもらえて、おもてなしの心が伝わるとても嬉しかったです。

着物着付け講習では、着物の種類や着用場面だけでなく、着物の構造についても特製の見本を実際に分解・組み立てして説明。生徒の中からモデル役を1名請け負ってもらい、桜の花と御所車が描かれた美しい空色の振袖を着付けていきます。聴衆に見守られながら着付けられていくモデルさんは、嬉しいやら恥ずかしいやら、終始はにかんだような表情だったのが印象的でした。その場を見守ること十数分、あっという間に美しい振袖姿が完成し、スマホのシャッター音が鳴りやみません！モデルさんも一緒に写真撮影をせがむ子どもたちも、とても嬉しそうでした。

折形講習では、折形の歴史や概要を説明した後、2パターンの紙幣包みを本物の和紙で作っていく内容だったのですが、ここでとても印象的なことが起こりました。「今回は結構ですが、本来折形を作る際には手を清めたくて心で込めて作ります」と説明したとたん、子どもたちがカバンからウェットティッシュを取り出し一斉に手をふき始めたのです。相手の文化を尊重し、そのすべてを体験しようとする姿勢に、交流団一同感心しきりで帰路においても語り草となるような出来事でした。私たちが、異文化に触れる際に見習うべき姿勢です。

最後に、私が担当した風呂敷講習。交流団メンバーのサポートのおかげで、要の「真結び」をはじめ様々なバリエーションの包み方もすべてクリアし、無事にお土産のミニ風呂敷バッグを完成させることができました。一枚の布が様々な形に変化していく様子に驚き、さらに実際に自分で再現することもでき、子どもたちの喜びもひとしおといった表情。準備の労力がすべて報われた瞬間です。

まだまだ書き足りないことがたくさんありますが、そのすべてが大変得がたい貴重な機会でした。特に、滞在中の私たちを終日サポートしてくださった、日本情報センター長のオディネツ・セルゲイ様には多大なる感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

お知らせ

●ロシア料理講習会 (2)

日時: 2024年12月8日 (日) 9:00~12:00

場所: 田町「リーブラ」料理室

●講演会

講師: 青島顕氏 (毎日新聞)

—「ソ連」を伝えたモスクワ放送・日本人との出会い—

日時: 12月14日 (土) 13:30~15:00

場所: トレジャーリンク貸し会議室 (京橋駅より徒歩1分)

参加費: 一般1,500円

*終了後懇親会あり (懇親会費1,000円)

申し込み: ①所属②氏名③連絡先④講演会を知ったきっかけ⑤懇親会参加希望の有無をご記入の上、メールまたはFAXで。

●キルギス料理講習会

日時: 2025年1月26日 (土) 10:00~14:00

場所: 田町「リーブラ」料理室

●ロシア語教室生徒募集中!

レベル別クラスを経験豊富なロシア人教師が担当いたします。個人、オンラインレッスンもあり見学も1回可能です。

*お問い合わせは事務局までお願いします。

Fax: 03-5563-0752 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。服部文男氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



日本料理講習会(4)に参加して

小川 久美子

令和6年10月27日(日)、日本料理教室に参加しました。日常的にはありきたりな料理をついつい繰り返して作ってしまいますが、日本料理教室では、小野田先生が色々な郷土料理や簡単に美味しくできるレシピを教えてくださいました。今回の献立は、かぼちゃの団子汁、蓮根のつくね、茶碗蒸し、ピーマンの塩昆布炒めでした。ヘルシーで、心も体も温まる美味しいお料理ができました。

私は、8月から日口交流協会の「ロシア民謡を楽しむ会」のコーラスに参加させていただいていましたので、今回のお料理教室には、コーラスで一緒にいる山口さんと参加しました。山口さんはウラジオストクでの留学経験もあり、すぐにロシアの方々とも打ち解けて、コミュニケーションを取りながら調理をしている様子でした。以下、山口さんの感想を転記させていただきます。

「ロシア人の参加者が予想以上に多くて驚きました。皆さん熱心にレシピを読み、先生の見本を真剣に見ていました。積極的に質問をしている人たちもいました。興味津々に楽しく料理をしている皆さんの姿を見て、私自身も楽しく料理をすることができました。

日本の調味料に興味を持っている人が何人かいました。後日お店で買うときに忘れないようにするためか、調味料の写真を撮っている人もいました。調味料の中でも出汁が一番注



目的で、先生に出汁について熱心に質問している人たちを見ました。そんな彼らを見て、『もしかすると、出汁の取り方や色々な出汁を使った料理などにも興味を持つだろうな』と思いました。」

今回の料理教室に参加されたロシアの方々には12名、日本人は先生を含めて6名でしたので、ロシア人3~4名に日本人が1名という割合でグループに分かれまし

た。グループに日本人が自分ひとりということもあり、失敗してはいけないと責任を感じていましたが、ロシアの方々が中心になってかぼちゃの団子をつくらしたり、蓮根をすりおろしたりしてくれました。出汁は、白だしと顆粒のだしを使用しました。ロシアの方々はかぼちゃの団子汁で使う顆粒のだしの匂いを、「肥料みたい」と言っていました。出来上がった料理を試食すると「予想外に美味しい!」と驚いていました。蓮根のつくねを気に入られて、子どもにも食べさせたいと言っている方もいました。また、簡単に美味しくできるピーマンの塩昆布炒めが好き、と言う声も聞こえました。

ロシアの方々は日本料理に舌鼓を打つと、今度は自分たちがロシア料理を教える番だとばかりに、日本人はどんなロシア料理に興味があるのだろう、こんな段取りならできるのではないかと具体的に話し合いを始め、私たちに好きなロシア料理を聞いてくれました。私は、お正月も近いので「Холодец」と答えたのですが、8時間も煮込むとあって却下となりました。それはともかく、次回どんなロシア料理に挑戦できるのか、とても楽しみにになりました。(常任理事)

ウズベキスタン便り

ウズベキスタンの刺繍スザニ

川端 良子

ウズベキスタンで盛んな刺繍スザニは、ヨーロッパでも人気があり、多くの専門書がヨーロッパを中心に出版されています。地域によっては、スザニ刺繍は女性が身につけなければならない重要な手仕事の1つで、女の子が生まれるとお嫁に行くときに持たせるために、多くの刺繍した布を作り始めたそうです。ウズベキスタンの中央部、タシケント、サマルカンド、ブハラ、スルハンダリアなどのスザニ刺繍が有名です。太陽のモチーフ、子だくさんの象徴ザクロ、ウズベキスタンの国の花でもあるチューリップ、アーモンドが起源といわれているペズグリー柄、様々な花柄、お客さんを歓迎するティーポット柄、炎や水をイメージした図柄など多くのパターンがあります。スザニ刺繍はタシケント、サマルカンド、ブハラで、スルハンダリアなど地方によって異なります。刺繍のステッチ方法は、チェーンステッチ、コーティングステッチが多く用いられています。タシケント応用美術館(旧:タシケント工芸博物館)に多くの素敵なスザニが展示されてい



スルハンダリア州ボイスンのスザニ刺繍

ます。ここには、他にも絹織物アトラスや陶器などのウズベキスタンの手仕事の数々が展示されていますので、手仕事好きの方におすすめです。

昔は花嫁道具だったスザニ刺繍も、絹織物アトラスと並ぶ女性の手仕事商品として、今はウズベキスタンのお土産店で購入することが可能です。スザニ刺繍の小物やバック、スカーフ、ストールやジャケットなどの洋服もありますので、ウズベキスタンを訪れた際のお土産物にいかがでしょうか。最近ではミシン刺繍のものも作られています。手仕事によるスザニは、木綿生地に木綿の刺繍糸を使って刺繍されているものが多いです。高級品になるとシルクの布地にシルクの刺繍糸で刺繍されています。100年ぐらい前の古いスザニ刺繍も専門店を探せば今も販売されています。高価ですが、全面に手で細かく刺繍されているスザニもあり、お店の人によれば3年以上かかったという大作もあります。お時間があれば、スザニ刺繍巡りをされてみてはいかがでしょうか。

(日本ウズベキスタン協会理事長)

国際放送史研究の戯言No30

国際放送史研究について、最近のあれこれ

島田 顕

ここ最近の国際放送史研究について、あれこれ述べたいと思う。

まずは、石坂幸子について。11月にNHK札幌放送局のHディレクターと渋谷で会った。HさんはNHK樺太放送局についての番組を制作するためにいろいろ調べており、石坂幸子（NHK樺太放送局のアナウンサーをつとめた後、モスクワ放送ハバロフスク放送局最初の女性アナウンサーとなった人物）のことを私が論文にしたことを知り、接触を求めてきたのだ。Hさんは結構調べており、ジャーナリズムの取材力には本当に感服させられた（もっとも、こちらもHさんが持っていないネタをいくつか提供したのだが）。

Hさんが調べたものには私が知らないことが多々あり、自分自分の勉強不足を痛感させられた。論文にした時にはわからなかった石坂幸子のその後の消息もつかむことができた。特に大きかったのは、武井照子、来栖琴子の著書『三十七年目のクラス会 ドキュメント「本日も晴天なり」』（主婦の友社、1981年）という本を教えてもらったことだ。それによると、石坂幸子は1950年に王子製紙に入社し、図書室勤務を経て、紙の博物館に勤務、1980年に56才で退職しているということだった。本書の副題となっている「本日も晴天なり」は、女優の原日出子が主演し、1981年に放送されたNHKの朝ドラである。原日出子の出世作となったドラマである。この本に出てくる複数の女性アナウンサーたちがドラマの登場人物のモデルになったという。だから石坂幸子もモデルの一人

だったわけだ。このことは驚くべきことだった（武井照子、来栖琴子には、これ以外にも著書があるのでさらに調べる価値があるだろう）。だが石坂幸子がNHKを辞めさせられた理由については疑問として残った。このことはHさんと認識をともにすることになった。女性だからやめさせられたのか、石坂幸子だからこそやめさせられたのか（エスケープゴートだったのか）、他のアナウンサー、局長、職員（たとえば、おおいすみお、しょうないふみこなど）はなぜ無事に帰ることができたのか。いまだにはっきりしたことはわからない。いろいろな疑問が残されたままなのだが、うれしいことは石坂幸子が帰国直後からさらに長い人生を歩むことができたということだ。論文のネタ元であるNARA文書によれば、病状が悪化し、危篤状態で、アメリカ軍の尋問も中止せざるを得なかったほどであったからだ。「長く生きてくれてよかった」というのが率直な感想である。だが石坂幸子の紙の博物館退職以降はどうなったのか、また新たな疑問も出てきた。

加えて、Hディレクターから私は新たな宿題を与えられた。当時のソ連側はNHKの放送をどのようにとらえていたのか、である。ソ連側のNHK放送の分析がどうだったのか。東一夫がハバロフスク放送局に入る前にタス通信にいて、モスクワからの日本語放送をモニタリングしていたことはすでにお話ししたかと思う。ハバロフスクでは西側の放送の傍受が行われており、その中にNHKもあったことは想像に難くない。やるべきことはまだまだであると実感したのであった。

幕末開港期から明治初年の函館でロシアと医学で結ばれた兄弟

倉田 有佳

函館には、医学の分野でロシアと結ばれた兄弟がいた。長男深瀬洋春（1834-1905年）と三男鴻堂（1844-1913年）である。米沢で町医者をしていた父鴻齋が移り住んだ先の函館で二人は生まれた。

ロシアとの縁を最初に築いたのは長男洋春だった。本人直筆の履歴書には「ロシア病院」の初代医官アルブレヒトと二代目医官のザレスキーから西洋医学を学んだことが記されている。同病院は函館に寄港するロシア艦隊の乗組員のためにロシアが官費で建てたものだが、そこでの治療を希望する日本人は大勢いた。箱館奉行所では、日本人医師に治療が難しい病に限り許可を与えた。当時の日本人に多かった病は眼病と梅毒だった。

初代ロシア病院（1858-61年）は自火で焼失するが、病床数を増やした二代目ロシア病院は、ロシア領事館（現ハリストス正教会敷地内）の隣接地に完成した（1862-66年）【絵図】。日本人が治療を受けることを一時期奉行所は禁じていたが、ロシア病院で日本人医師に西洋医学を学ばせ、日本人患者が出入りすることを許した。なお、同時期に誕生した箱館医学所（現市立函館病院の前身）は、無料で日本人も診療するというロシア病院の噂によって開設が急がれたといわれている。

三男鴻堂は、開拓使立函館魯学校教師のサルトップが自宅で急死し（1874年）、アメリカ人の



「箱館真景絵図 文久二年」の部分（函館市中央図書館所蔵）

お雇い外国人医師エルドリッジが死体解剖する際に日本人医師として立ち会った。函館病院の二代目院長に就任した翌年（1879年）には、聖アンナ三等勲章が授与された。後年の氏追悼記事に拠ると、推挙したのはニコライとアナトーリ[ニコライの後任司祭：倉田]だった（『函館新聞』1913年7月11日）。

ニコライとの出会いという点では、洋春が先んじていた。箱館奉行が試みた「出貿易」のためニコラエフスクに向かう途中、洋春らを乗せた洋式帆船「亀田丸」は座礁。救助に当たった「アメリカ号」にロシア領事館付属聖堂司祭として函館に派遣されるニコライが乗船していた。1861年のことである。約20年後、ニコライはホンコンから横浜に向かう船中で当時の自分を思い出す。立派なリヤサを着て亀田丸を訪れ、深瀬医師（※）に話しかけ、大事にしてきた磁石盤を贈ったのだ。ニコライから見舞いの言葉をかけられ、安全航海の助けとなるコンパスをもらい受けた日本人一行は、無事目的地に到着。洋春は東シベリア総督カザケーヴィチを治療し、お礼にももらった骸骨、オルゴール、麝香獣(?)は、函館病院の医学講義の教材となった。

深瀬一族は、現在も函館の医療現場で活躍中だ。

（※）1880年11月7日のニコライの日記の訳註「父親の方の深瀬」「鴻齋」は誤りで、「старшему」、つまり「三男ではなく長男の方」の意で「洋春」を指す（中村健之助監修『宣教師ニコライの全日記』1巻、教文館、2007年、341、561頁。ロシア語版1巻324頁参照）。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

灯火(ともしび)へ

畔上 明

現在の私は70代半ばとなりますが、振返れば35歳のとき、人生の後半はもう少しロシア語がしっかりと喋れるようになろうと、神保町のロシア語書籍販売店で見付けた「ロシア語会話」勉強会の案内チラシ。中村さんという女性がスヴェトラーナ先生を講師にロシアと関わる仕事をしている人たち10名ばかりを集めて、毎週木曜の晩に会話練習に励んでいる場に私も参加したのです。

日本語は一切使わない先生の教え方は巧みで、分からない表現が出てくれば、理解に及ぶまで徹底的にロシア語で細やかに説明してくれます。先生が独自に用意したテキストのプリントも辞書なしで不思議なくらいすなりと入り込むことが出来、その見事な美しい例文に感心しながら次回までに暗記していくのでした。

主催の中村さんがいつの間にかいなくなり、私が会費集めや会場探しなどの世話役となりました。3年間スヴェトラーナ先生の授業を楽しんでいたのですが、1989年先生がモスクワに引越されることとなり、日ソ貿易協会の協力を得て、新たにマルガリータ先生を紹介してもらうこととなりました。

モスクワ大学でロシア語教授法を学んでおられたことから、日本の大学での学習とは違った私達にはとても新鮮な入り方、例えばドッチボールを投げ合いながら受け取った人が即座にロシア語で自己紹介をするといった体を使った会話、当時初めて知るチェブラーシカの愉快的歌を覚え、ロシア式のジェスチャーを学び、「繰返しは学習の母」というロシア語の諺から新しい表現は毎週ごとあるごとに口にするなど、ワクワク感がありました。

マルガリータ先生は、ご結婚相手が母タチアナさんと



彫刻家の父富田氏のハーフのご子息とのこと、モスクワのガガーリン広場に建つレーニン像が義父の作であること、現在の新宿アルタが建つ以前「二幸」食料品デパートの地下で義母が「ターニャのピロシキ」という店を開いていたこと、そんな話を伺い、十代の頃の私が「ターニャ」のお店に立寄ってはおよつにピロシキを買っていたことを思い出したものです。

先生の提案で勉強会のУстав(規約)を作成、会員はロシア名を持つこと、毎回必ず何らかの個人的ニュースを発表すること、会長は50代半ば最年長の安部克己さん(サーシャ)、副会長は私(アリョーシャ)といったことが決まり、会の名前をHa oгoнeк [ナ・アガニョーク 灯火(ともしび)へ] としました。アガニョークはロシア民謡などでも馴染みの単語でしたが、ナ(～の中へ)を付けることでどのような意味となるのかを先生は説明して下さいました。「旅人が荒野を彷徨っていた時に人家の明かりを目にして向かうと、誰でも迎え入れてくれる」それがロシア語勉強会の精神、会そのものは十年以上も続き、事情あつて去る仲間もいれば新たに参加する仲間もいた[ナ・アガニョーク]の集いでした。

60代半ばでこの世を去られた安部さん、そのお墓参りにマルガリータ先生と房総を訪ねたり、コンサートや大使館でのパーティで御一緒したり、仲間と海合宿をしたり、先生との交流は8年前に帰国されるまで続いたのでした。

左: 2016年2月27日マルガリータ先生とのお別れ会にて

スモレンスクのテニシェワ夫人

浜野 道博

モスクワに住んでいると視線は自然と東に向かう。はるか極東の日本との間に広大なシベリアが横たわり望郷の思いもあつて、シベリアのどこに何があるのか土地勘も湧いてくる。ところが、モスクワの西や南となるといつまでたってもどこに何州があるのかさっぱりわからない。東京に住んでも人によって栃木と群馬がどう並んでいるのか見当がつかないのに似ている。モスクワの西隣のスモレンスク州も自分にとってそんな土地だった。

ところが、歴史をひもとくとこの土地は隣国との大小の紛争に何度も巻き込まれたただならない地域だと分かる。黒土地帯にあつて土壤にめぐまれ、古くから発達した河川交通に沿ったスカンジナビアとビザンチンの南北交易の要衝であり、ロシアとヨーロッパを結ぶ東西の回廊にもあたる。そのため諸勢力がぶつかり合う交差点の運命を負ってきた。

スモレンスク公国として誕生した(1054年)あとリトアニア、ポーランド、ロシアによってとったり取られたりしてようやく1667年にロシアに編入されたが、その後も1812年ナポレオン戦争の激戦地となり(L.トルストイ「戦争と平和」)、1941-43年にはドイツによって占領された。スモレンスクの町はそ



のたびに荒廃し、その都度再建されている。そのため、史書に登場するのがモスクワよりさらに280年さかのぼる古都であるにもかかわらず、町の造りは近代的で、あちこちに残る史跡や教会がこの町で繰り広げられた戦争の跡をかるうじて語っている。

そんなスモレンスクに行ってみようと思ひ立ったのは郊外のタラシキノ(Talashkino)にあるTeremok(写真)を一度この目で見てみたいという単純な動機であった。Teremokとはスラブ圏の民話で登場する森の生き物たちの寄り合う「館」なのだが、語り手によっては大きなキノコだったりもするおとぎ話の舞台である。

モスクワからスモレンスク市まで370km、急行電車で3時間40分。駅から約20kmのタラシキノまでは車で30分かかって到着した。この一帯は1893年から1914年までテニシェフ公夫人(マリヤ・テニシェワ)の所有地で、当時ロシア古来の美術

品の収集に努力を傾注していた彼女はタラシキノに今風と言えばロシア工芸品の振興センターを創設し、ヴルーベリ、レーピン、レーリヒ、両ベヌア、ストラビンスキイなど時代をときめく芸術家たちがタラシキノを訪れ、タラシキノはモスクワ郊外のアブラムツェボと双璧をなす芸術サークルの拠点となった。

世紀の変わり目のメセナの一人であったテニシェワ夫人の追い求めたものが何であったのか、次稿で紹介したい。